窮理捷徑

十二月帖

内田晋齋著

上

特34-446
1200800182005
特34
446

大日本教育會書籍館
二二函
三架
五七號
二冊

始

内田晉齋著

窮理捷徑 十二月帖 全二冊

明治十五年冬一月再刻 玉養堂發兌

特34 140 特37
360
東京書籍館
明治十年 図書局文庫

窮理捷徑 十二月帖 上

内田晉齋著并書

新春之御慶(ぎよけい)(オイハヒ)千里(イヅコノハテモ)

同風(オナジサイニ)目出度申納候

先公全家中ヲ
ゴカナイギウ
蒙福ヲ超衆事
ナニヲフクナク　トシコエ
以賀宴ヲ設会一同
ワガイヘ
等少長馬歯ヲ加ヘ中ヲ
トシノカズ

以修仁徳ヲ
アンシン
佐世界万国綏
シヨコクノ
ヲ新ヲ八紘天下
ヒトグ
万民老幼服
トシノハジメ

少者式部丞

朱衣官人

序正官人

[illegible]

トシノハジメ

[illegible]

イハヒノコトバ　旁ノ字

[illegible]

[illegible]

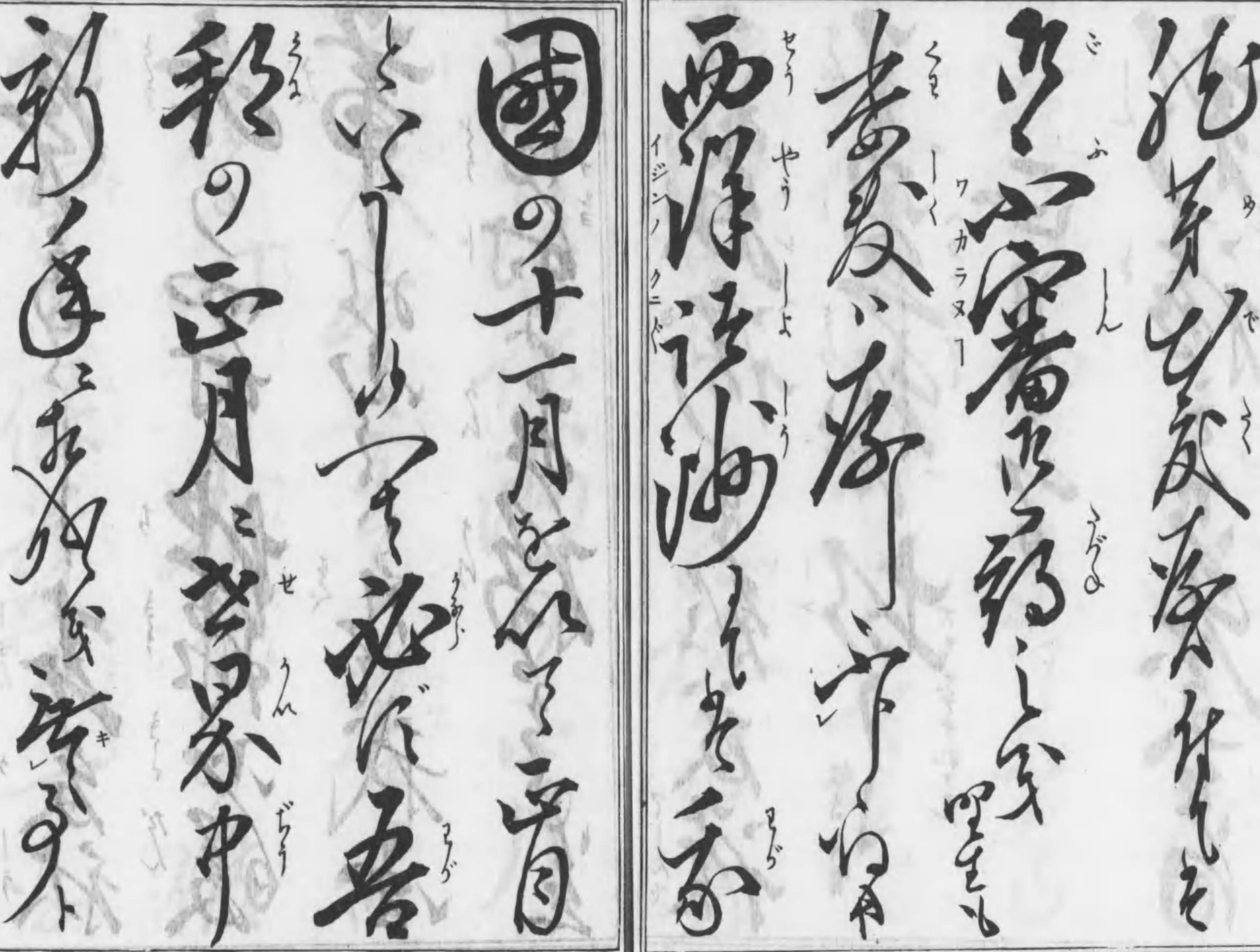
頓首ノ艸書

ニヘタテガミ　ツヲサゲテ礼ヲスル

正月元日

新禧之慶当

トシノハジメ



度々まぐれ春秋
冬の四時は地球巡暖
常に変化して我国
と同じ時を移す

イッショ

西洋法法の正月
不度々々に来る
度々時に春の雅

タビイマ　ハル　サム　コロユエ

時宜保養専一

ジコウニサハラスヤウニオカラダタイセツニスルヿ

山茶花（さざんくわ）　復ノ字

晴（アラマシ）日（ゴヘシジ）十（づき）本

潮（やうや）来（ちくり）暖（ぐん）日

暮（さくや）夜（いくよ）の（ぐん）月

蹄（しゃん）を（ち）屠（ふ）者（ものの）列（たぐ）て

蹄（ハツガミナリ）を（ん）集（もん）る

少（ん）時（ん）耳

月（ざん）の（ん）明（ぱう）

雲（ん）を（ん）色（ぱう）

少納言惟宗孝式
東宮亮藤原朝臣
起居理令少納言
従五位下行式部
少丞兼大学助教
訓点賀茂宿禰
二月廿六日
前殿屋之理令式部
丞兼大学助教
宿禰一朝

一夕ニ山雷ヲ生ス

元天振ノ元元元元元元元元

雷ハ越歴(ヨレキテル)ノ働キ

ヨリ起ル所ノ氣

二陰陽ニ二種アリ

凡天地万物の業物

少時ニ持ツ所ノ

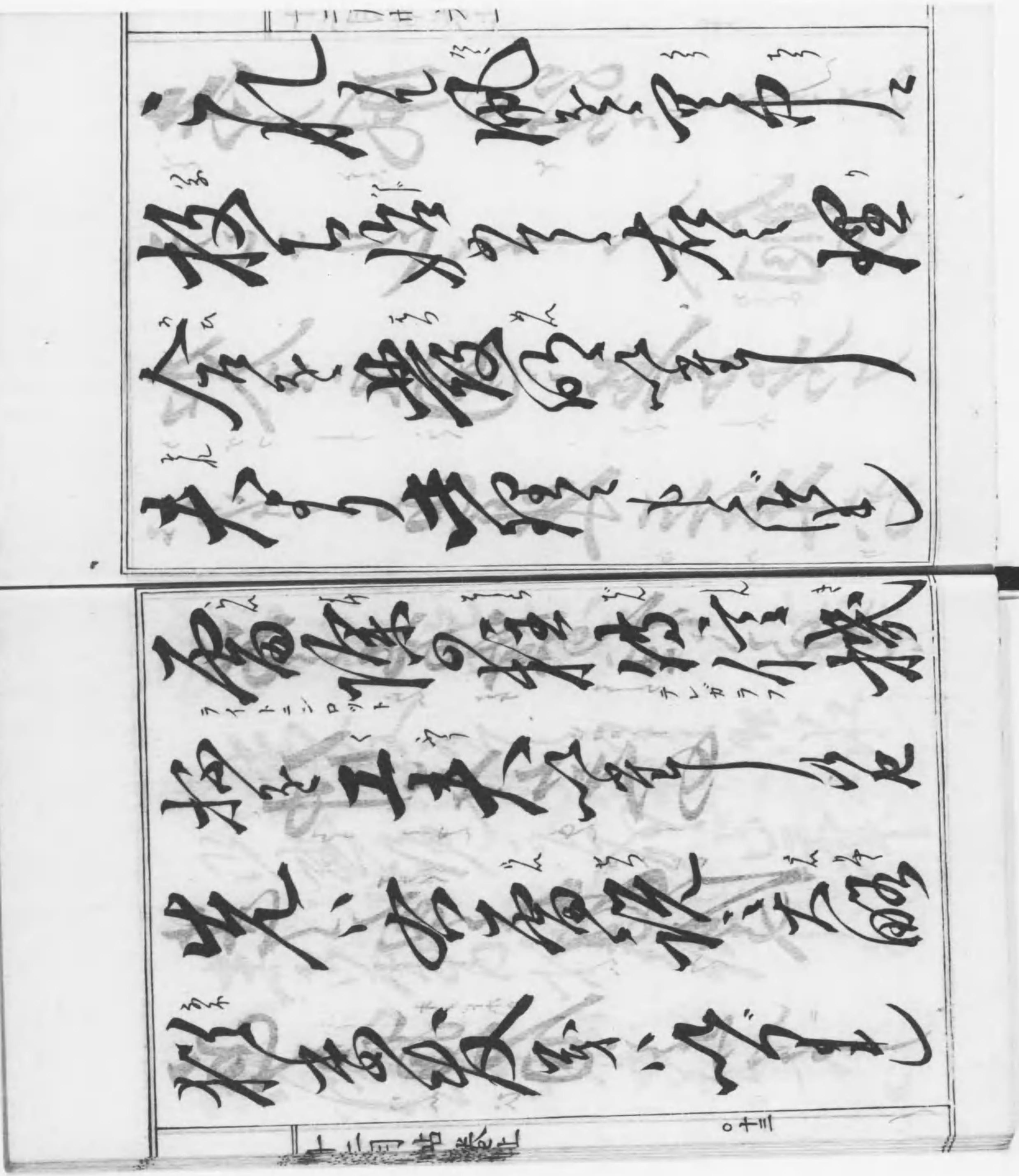
所ノ愛ニ陰乃越

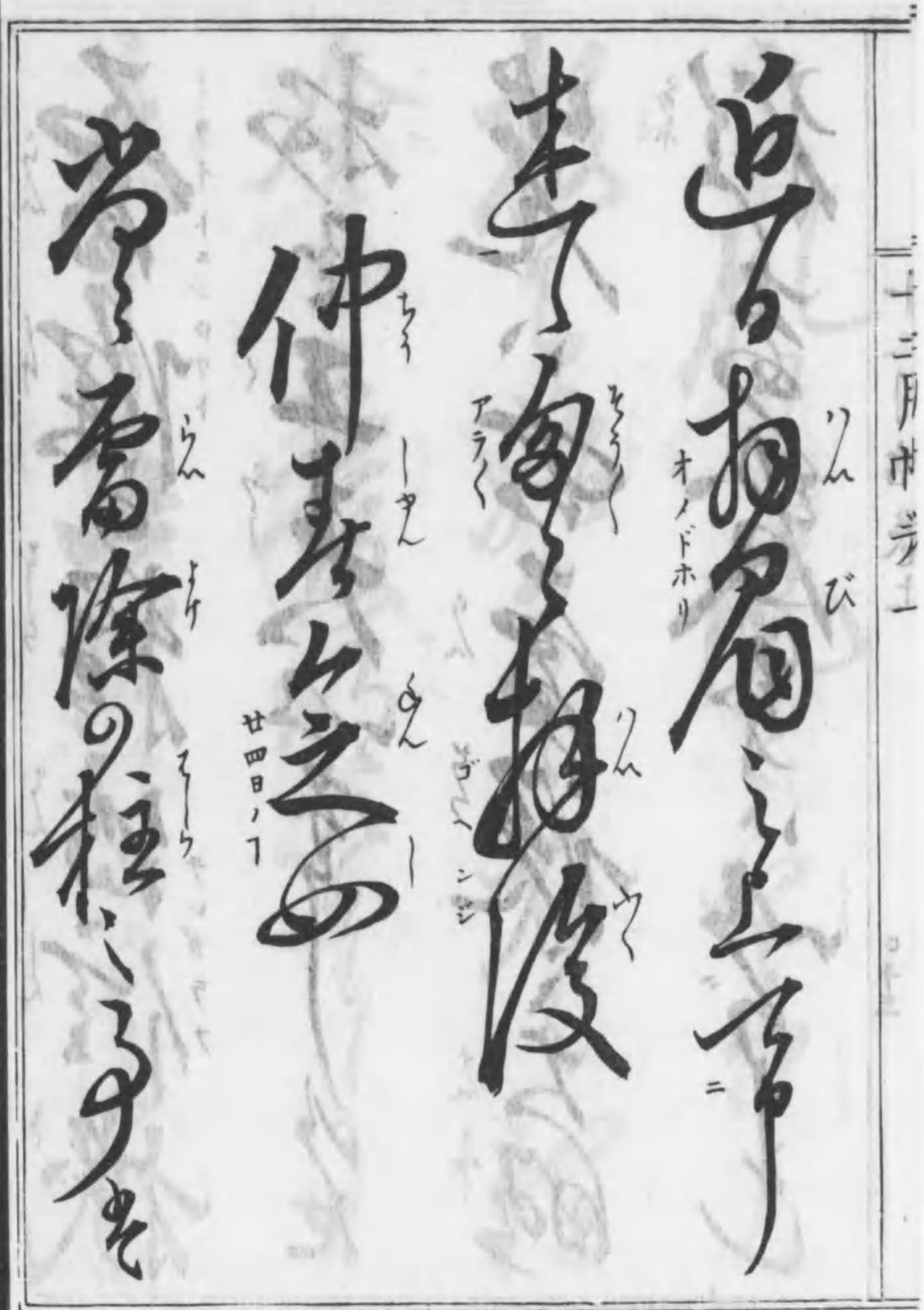
藤筆をはじめ出家
雲と消の城麓家
を起す屋上をし
対修羅の二家互
に

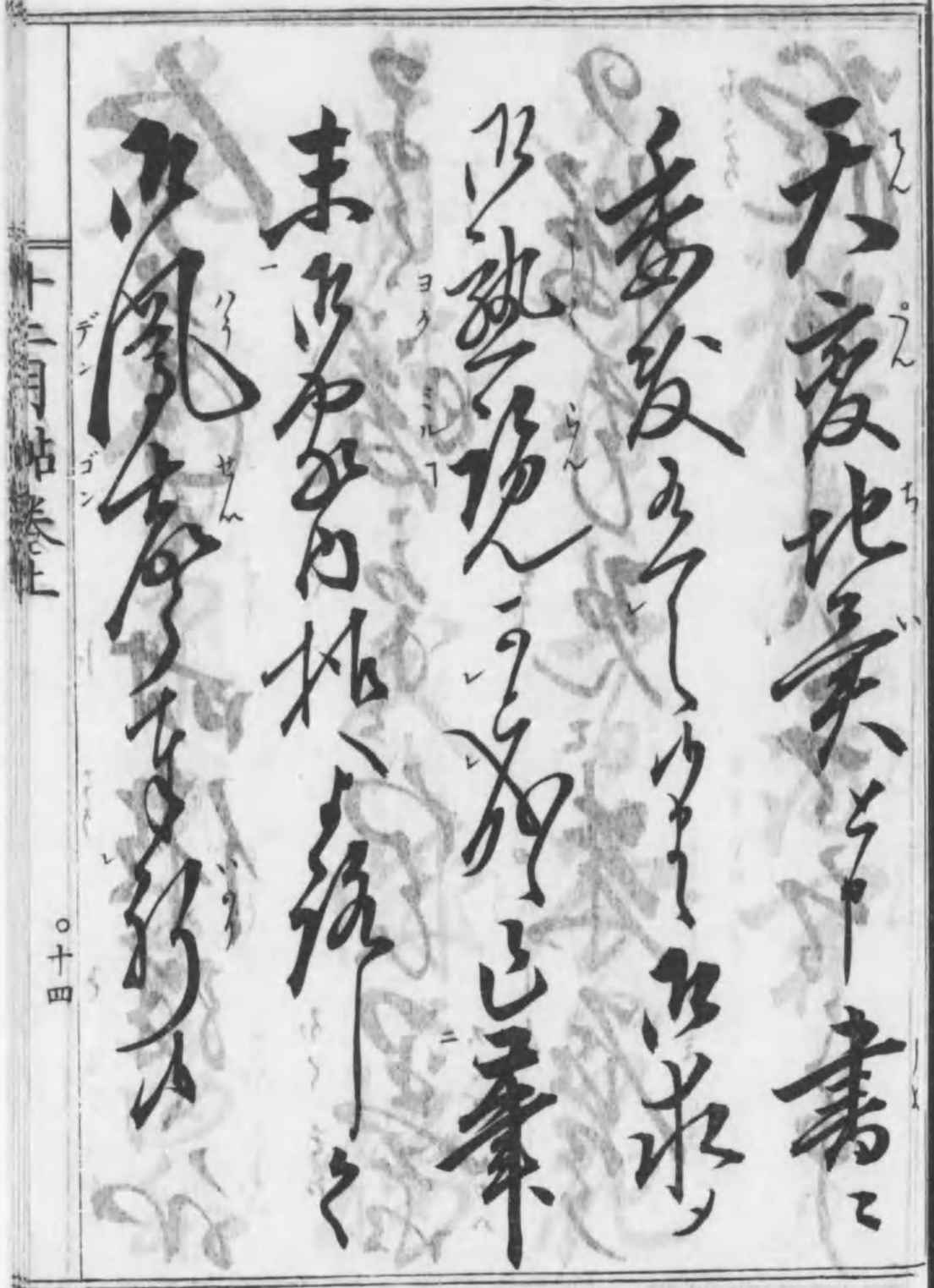
お合しを手に掌捐城
月人多を新し刃を
也市ヲ花月夜
乃お合を集に

故山理を学ぶ
考可然杳冥光光
中に殷々たる雷
鳴を聞て林間に体笑

こゝろ高く業を
加今京國に學者ノ
ラシキリシを人銅の
糸風の結ぶまこみ







今年時候和
暖日なかに白雪
の梅花に朱唇
咲けばこゝろ
ゆたかなる春

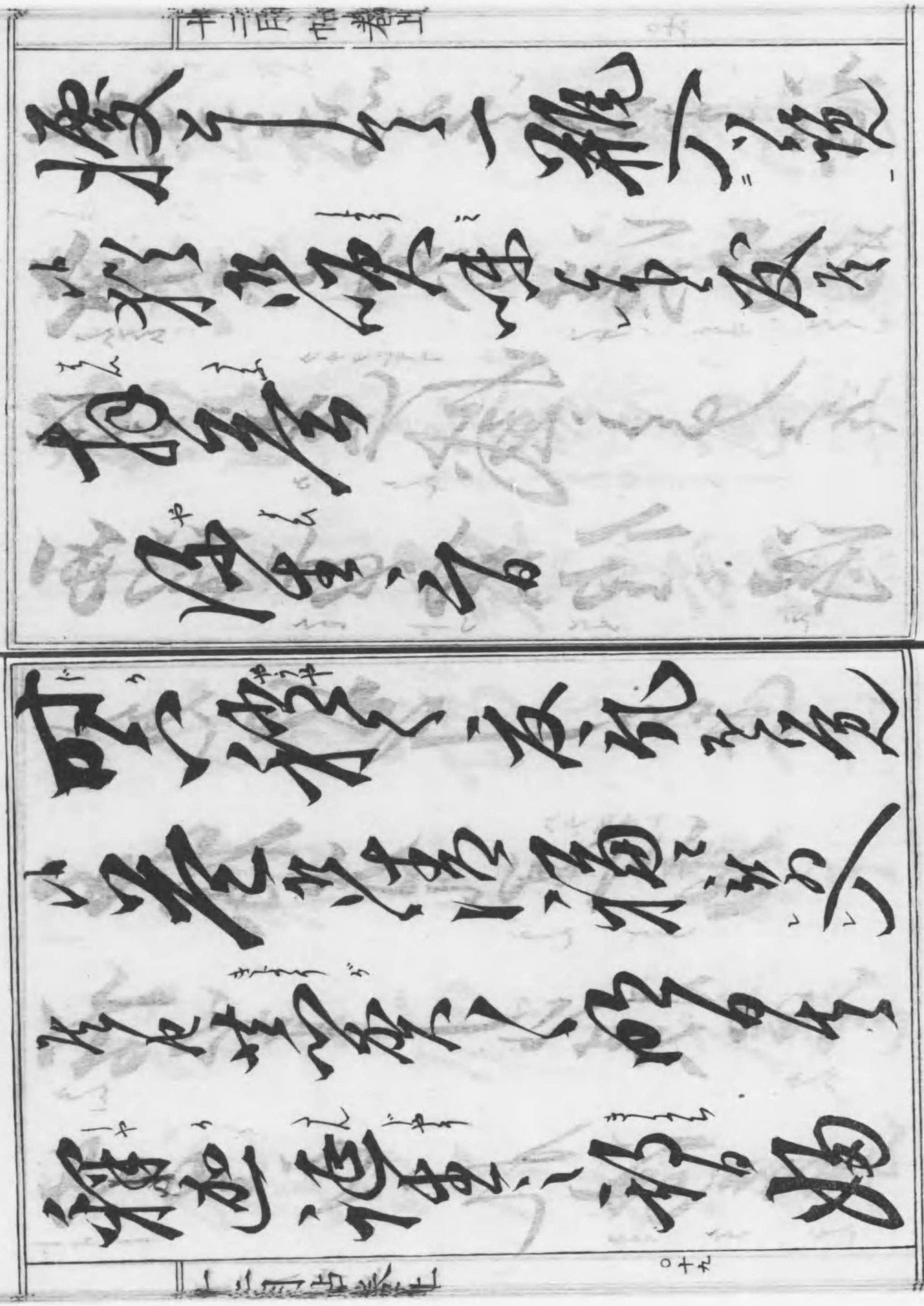
きは極楽浄土にこの
世の花の百貴花
は同位に成ぬ梅
花の色中の王海和

世数、物ト影ハ沈ム
ウタヨミシラツクヒト
の茅屋に住る居
ソギ
草窓に禅心ゴトク
草庵に老生ゴセウ
如何ゴウ
三百ゴウ
楊花ユウクワ
子ハ家生の艶エン
ウツクシク

の、巨大（まがん）すること具体の
甘美（ウマイ）（巨手）（ひ）（ん）
西洋人（さんしゃ）の文言（ことば）を色（さ）
ーアハ花（ハナ）日本実（ミ）

遠ク及バヌ　左傳僖公二十三年ニアリ

西洋事実（どつそう）作（ゑ）得
ぬ美遺（かうん）機（ハタ）
（クチヨシキ）
（さんさい）
才三三実の清物（つけもの）
米三品（ものしな）



如是刹那清業
相分無口生
不稼穡無動
免日暮ハラゴナシ

世界情ひとり
方程世生死
天竺の仏
三千世界中

之様ニ成ル事ハ
所表ハ[ん]ド[セガレ]ハ
一向ニ[ろく]ハ
或ハ[ろく]ハ

[しゅん]ハ[タヅネ]ハ
[ト]ハ[いのう]ハ
[ん]ハ
拜ノ字
四月七日
貴殿御[ん]

暑気ハ追日増長
申候処弥御清祥之由
珍重存候明日者
灌仏の会ニ付
浴茶の来福のため
拝見甘露是誘
引申度候何
寺の面倒なから

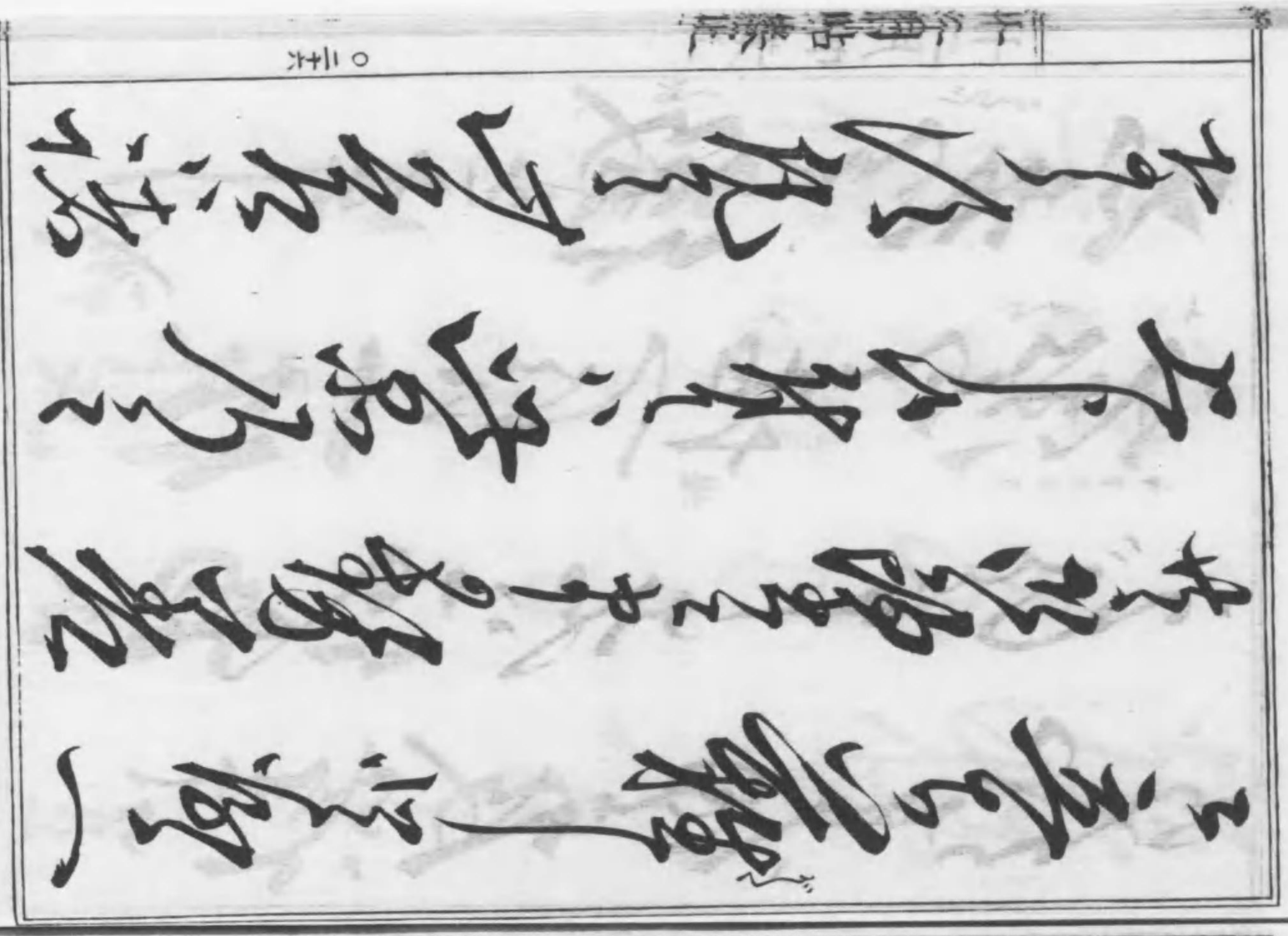
黒髪は伏し倩り形
鞠迷ひ出づる地を天
竺の面、紹、揚茶
ト呼ぶ今は美吉秀

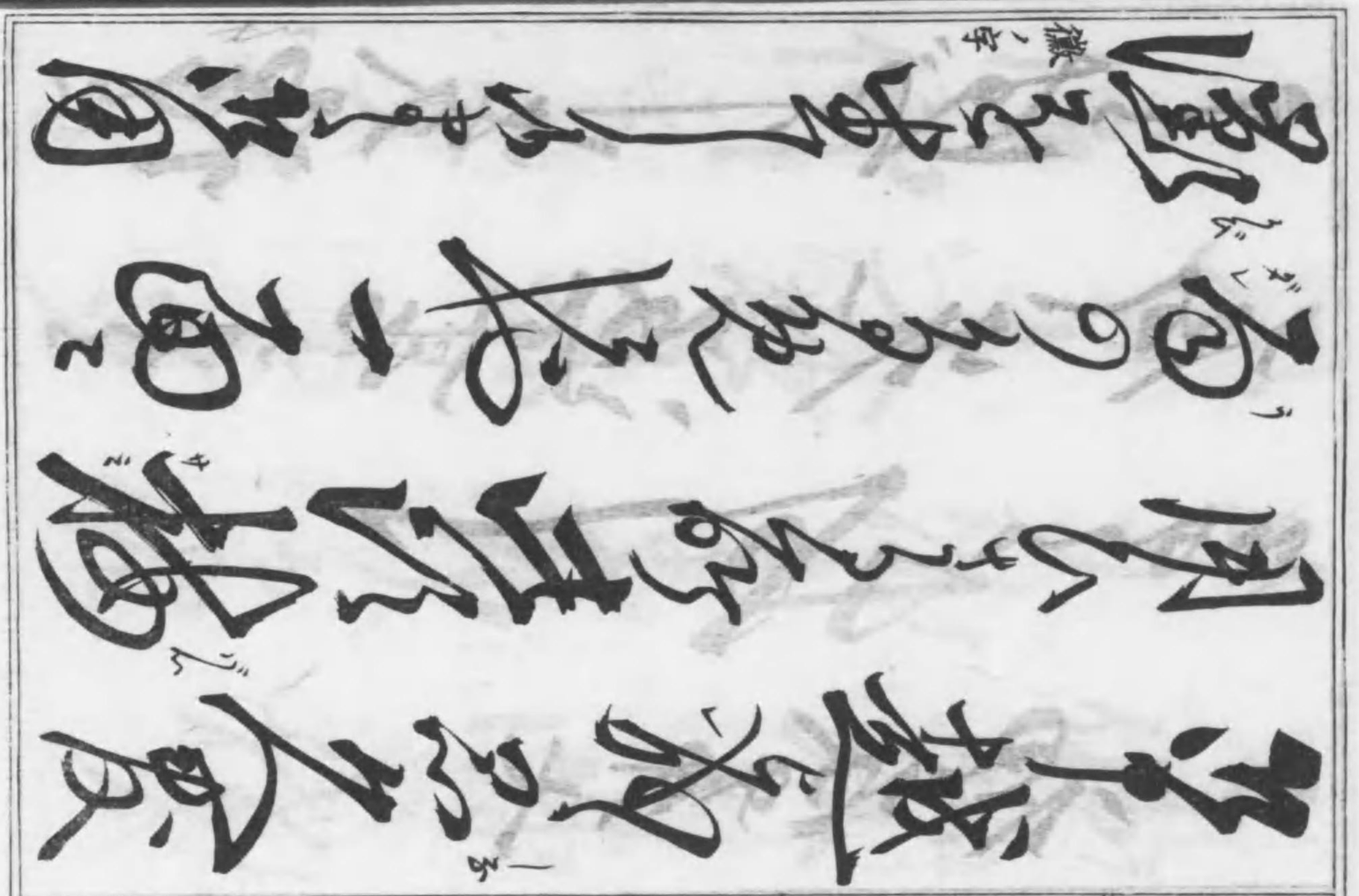
三領分の大好物
の港より我が横濱
杯の中に壺に及ぶ
不ずば先肉桂

の名吟ずる事
隆ひ数十里に渡
まで脱海せざる
者を記する事
聽ノ字

乃至伝徳を
授ける文を
を考ふる当今多く
婆羅門耶蘇教

て仏教を崇て神
明を敬ふ事は他
国の支那日本に多
く仰ぎ尊ぶ事なり
て孝道を
尊ぶ先達書中
に
初夜第七





忌参り御を出す

宗湛坊一体

キタナキ

堪

うぶ中赤子仏出ル

必ず参り度諸人至

堪持ち有り

ミジカキテガミ

五日十日

舌大切ニ印肉界

建立僧ハ年ノ内ノ

鄙一向好所雑書を
少礼乍去直に梅図
の書を見る已に書物うき候
其外汚穢を畏候

小所より物成生く
本を汚候事
左千断原兼かい
肉眼にて見る事も難

人ノ目ノ鏡ナドヲ用ヒサルヲ云

キタナキヿ

ナリタチ

実に深の林を見へ
自然に風を顯はす
其尺寸の内に
種々の物元と一
種々少なくして
為黄白黒の色をま
ぶ一筆毫毛の
法を尽し一目
を驚かす能はず

蟄虫の理を失ふ

草木トロ回り定日

温燥に拘合てまりて

生長ス事能ハザル

敬復ノ字

蕭月十日

甚暑ニ猴ニ和

為立ハ健歩超ス

金糸織物（ニヨロコビ）

一回買賣（カハリナク）

浮世絵（シンパイ）

自動車

巻煎餅

氷菓子（アイスクリーム）

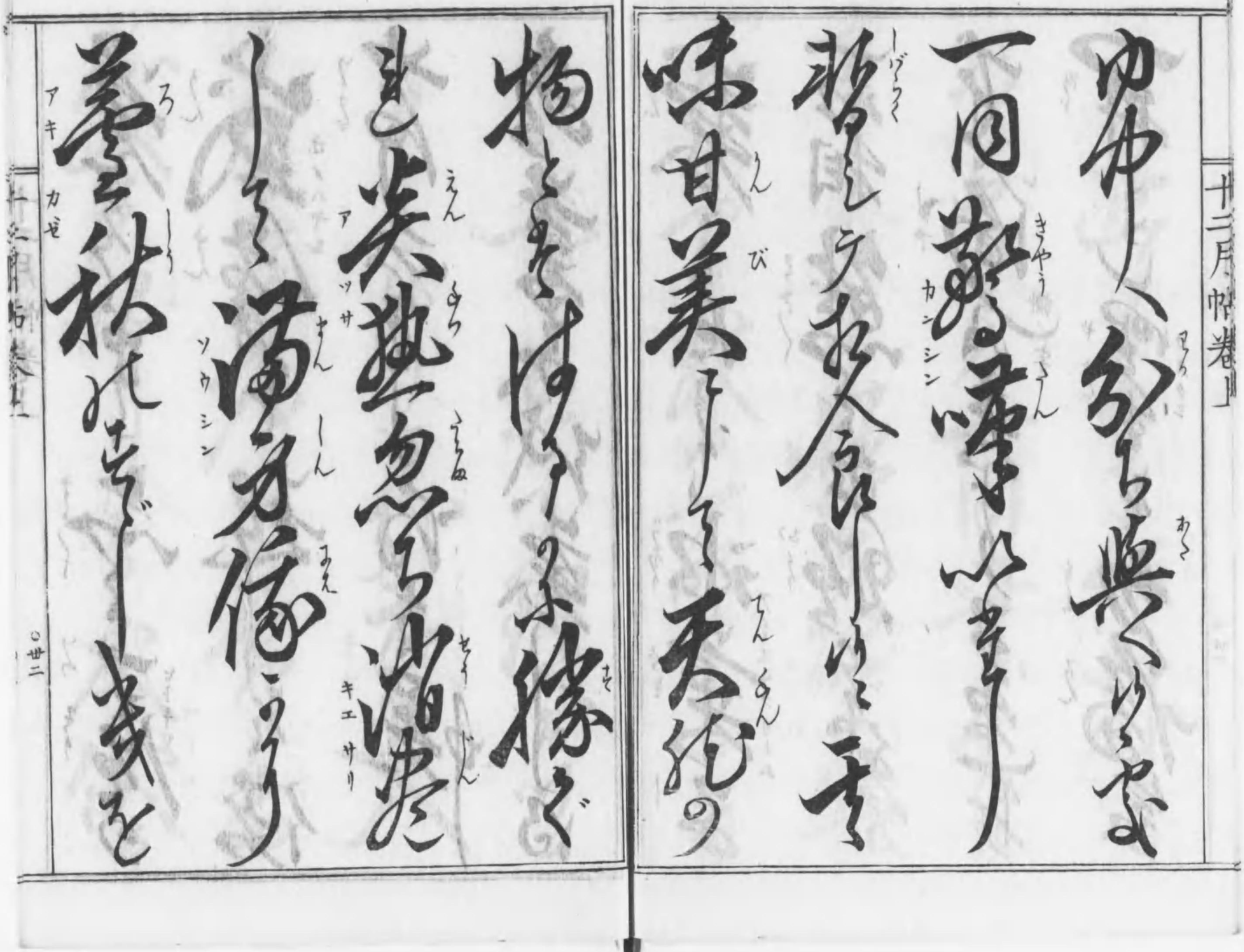
一箱能楽

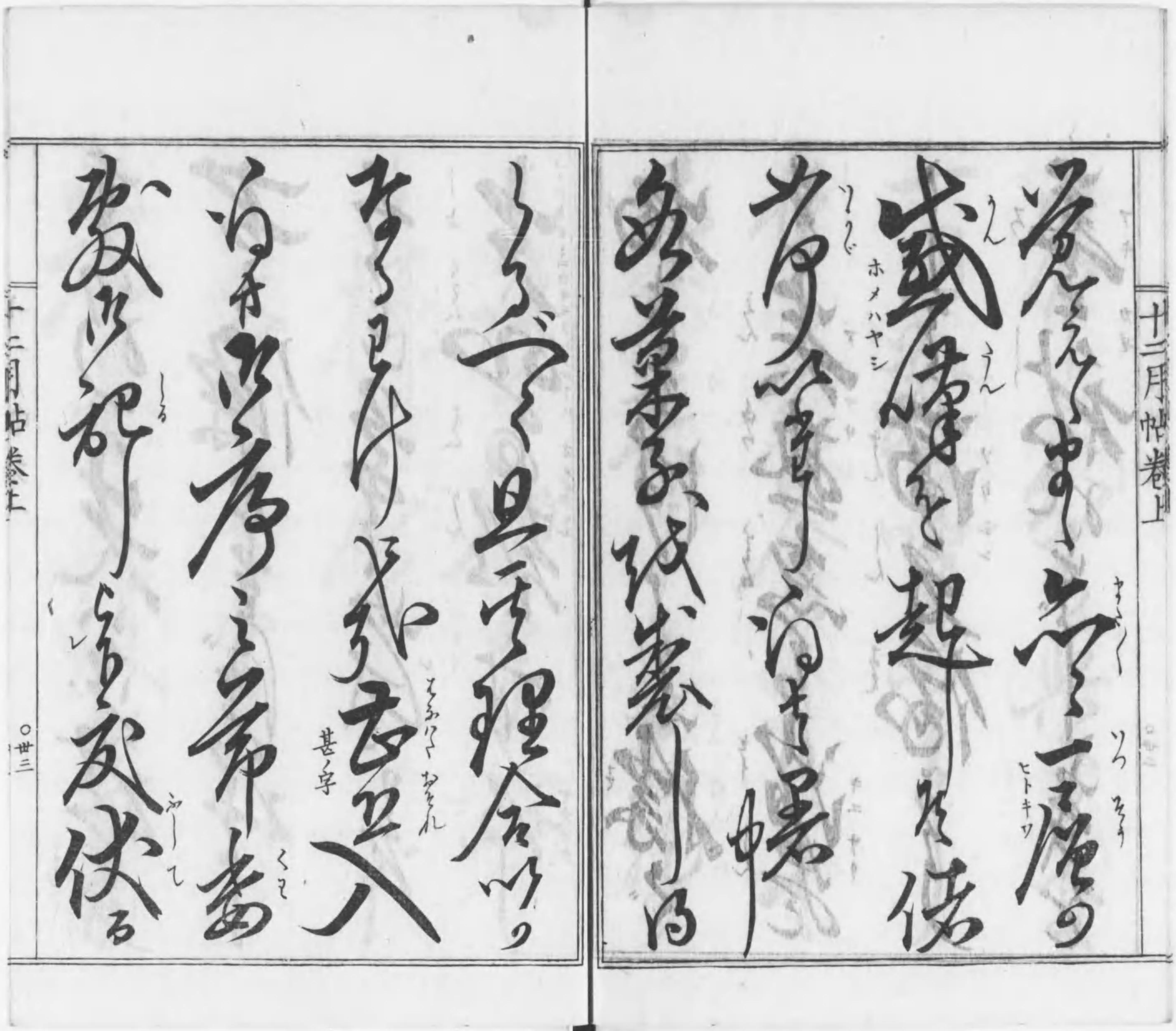
夫婦茶碗

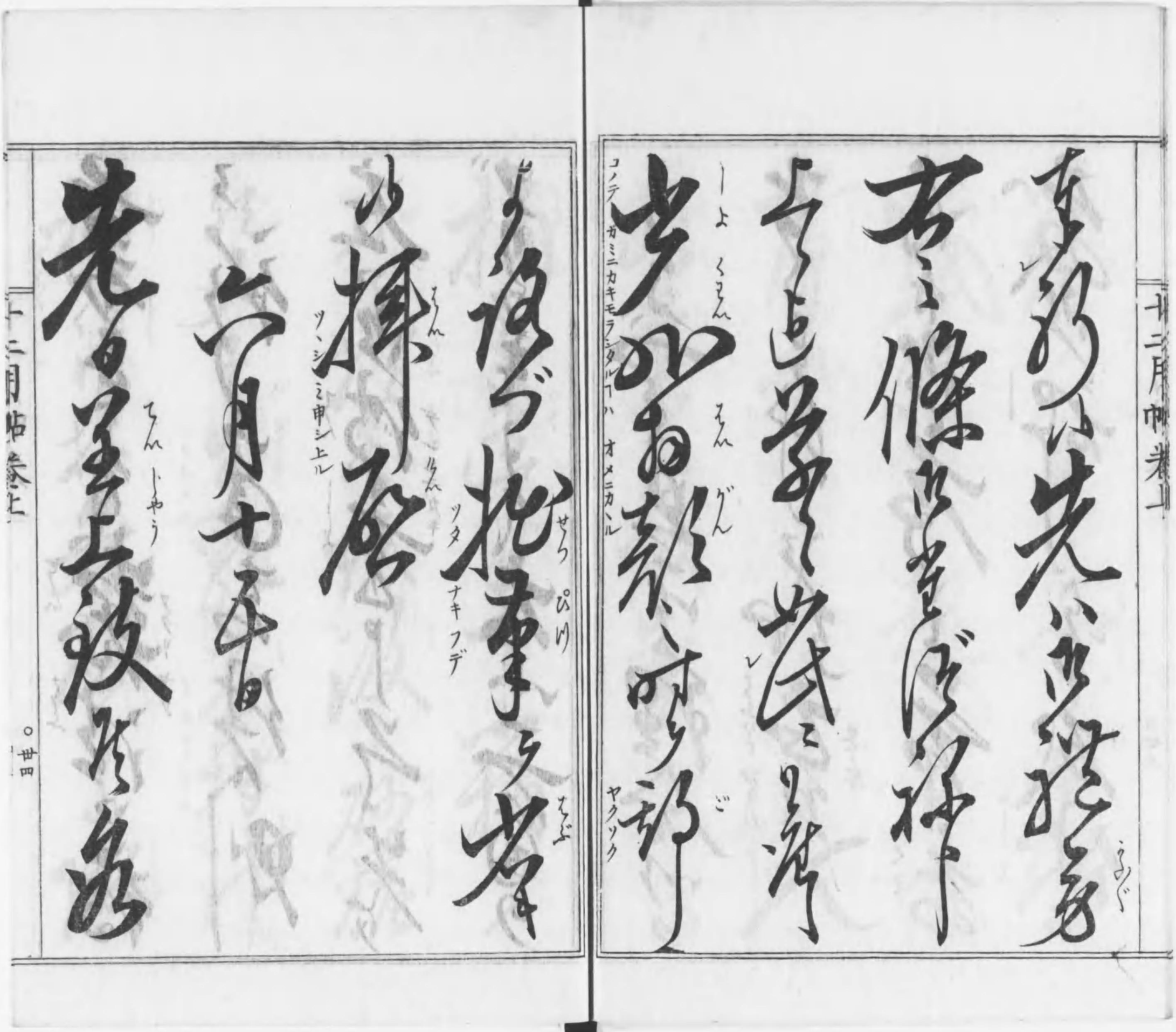
夫より菓子（謝の字）

拝見（ワタクシ）

四畳半







コノテガミニカキモラシタルヿハ オメニカヽル ヤクソク

ツヽシミ申シ上ル

蕎麦、自然薯汁、
ツクリヤウ
ゝ餅、吉結則
左ニ出結、書ヒ、ヲ先ツ
デンジユガキ
ブリワキ、大小二百の

桶を出り、三ツ箱の
ケン　ヒロ
方ニ沙糖、成浸砂糖
ク　サトウ
乳、蜜柑汁
ギウ　ミカン
ウシノチ　ミカンノツユ
極上、拍子名好ゝ地
ダイクノツユ　シタ

ひゝ[illegible]をよりて[illegible]

中〻温和(うんくわ)(くハヘセル)なるより

中相を大相の内〻入れ

結晶(けつしやう)醍醐(だいご)(さんぢう)菴(あん)毋(も)屋(ヤ)ト

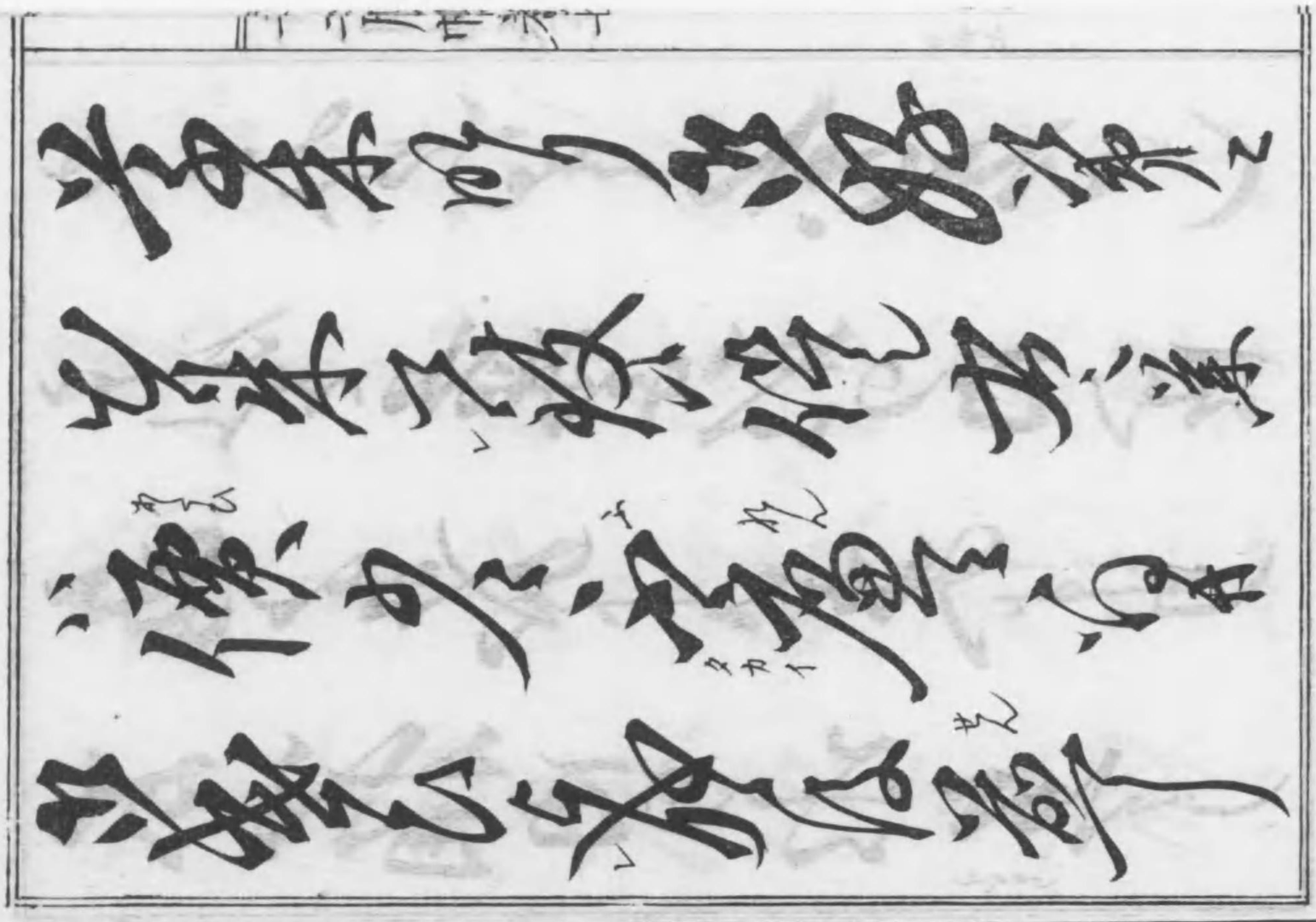
中業を少相ト大相の

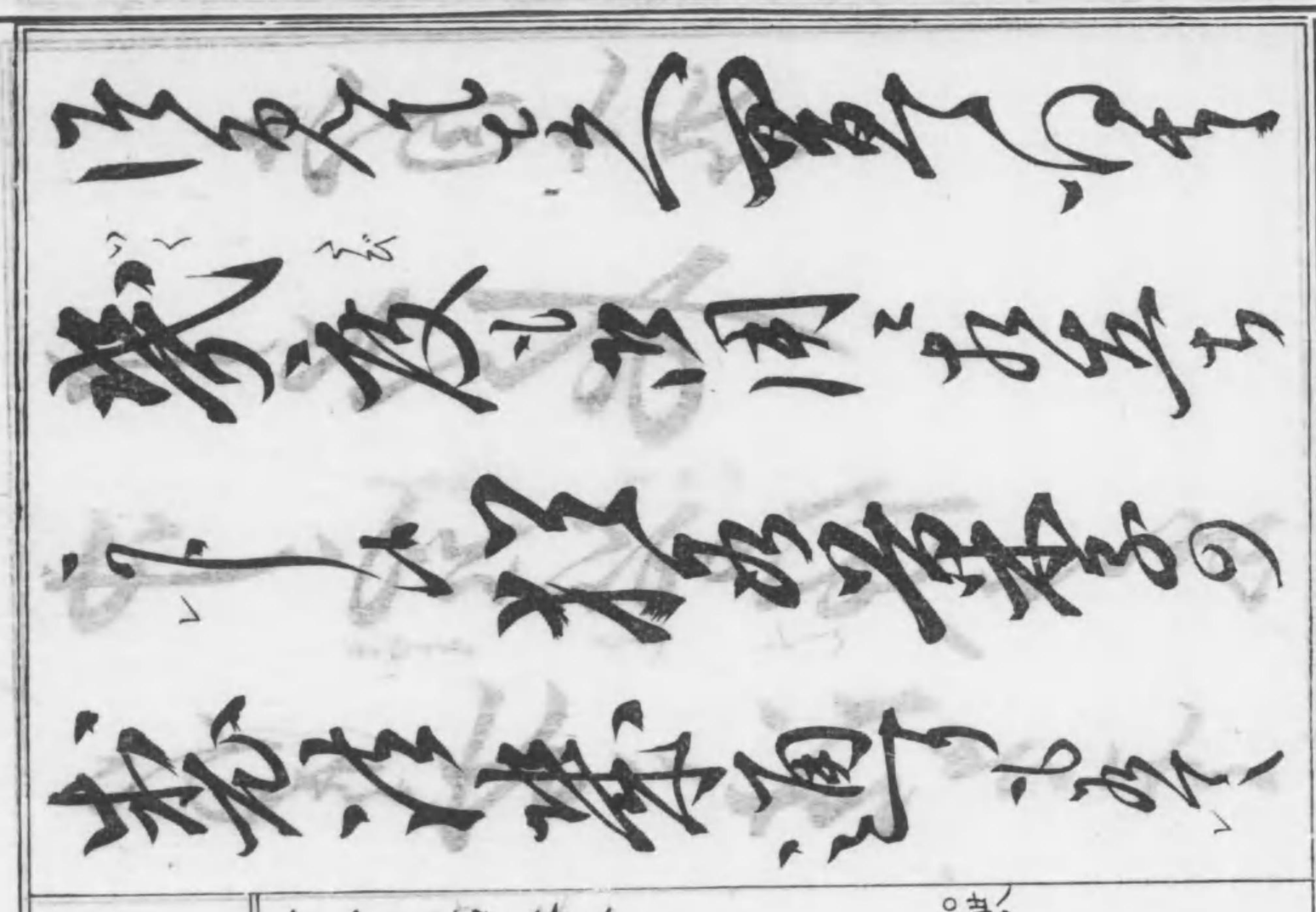
冥々衆多(しゅた)入れ

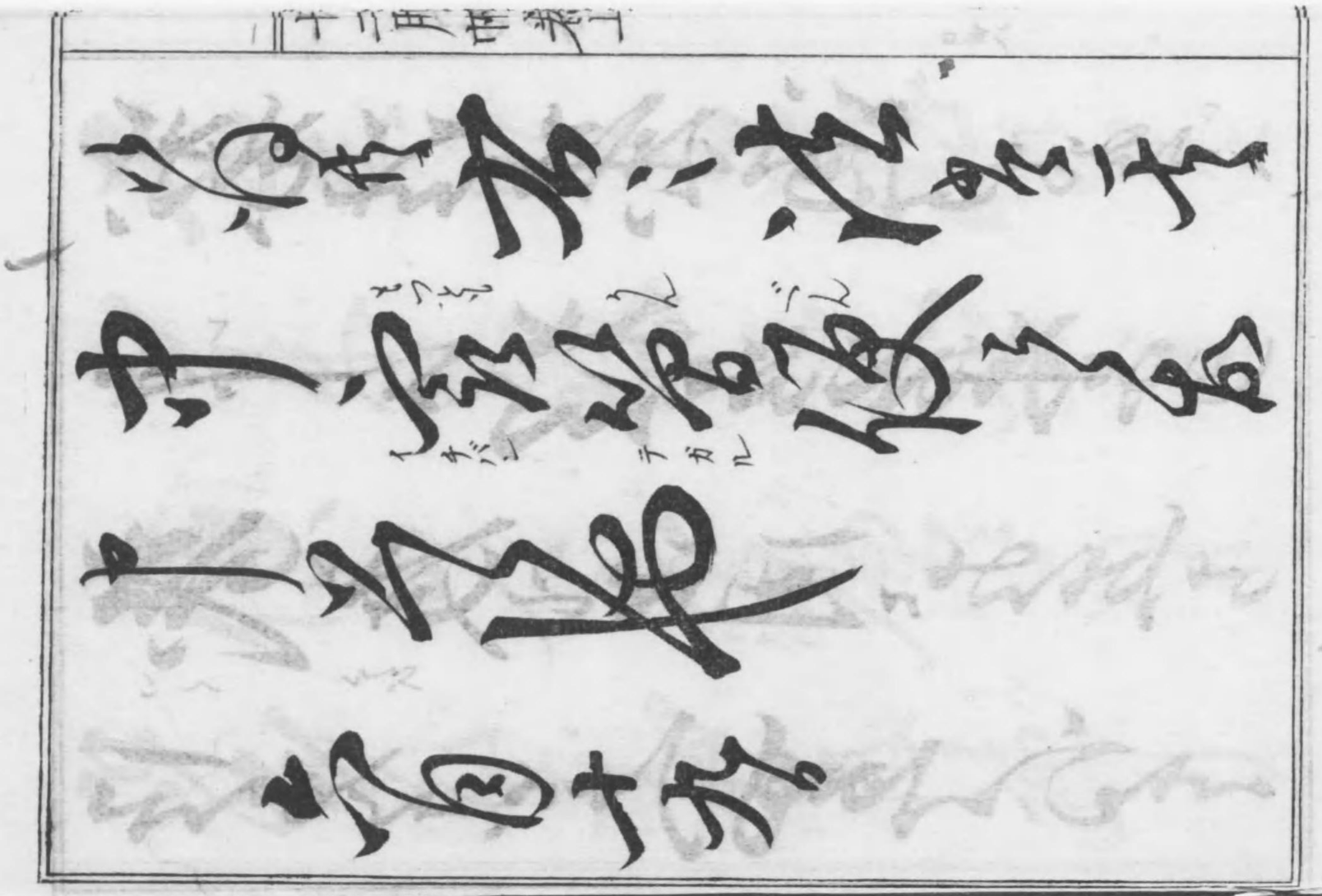
こゝを本業の手本

清水を注(そそ)ぐ

茶菓の為に細工
及び水仕洗度毎
減じ一貫目宛計二貫
八十七度位に成
茶少箱内の水差り
為に成よりは大よりも
多を菓子形の内に
めて入れ置こと







終